

自然を想う日本のこころ
目には見えないけれど
大切なもの

神社本庁

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-1-2
TEL.03-3379-8011 FAX.03-3379-8299
<http://jinjahoncho.or.jp>

環境に配慮した用紙を使用しています



山

山には、人間が住む里にはない神秘的な力が宿っていると考えられてきました。

古代の人々は、岩や石、木々や草の葉までが言葉を話していたと感じていたようです。これは草木にもいのちが宿っているという日本人の感性に由来するものです。

樹木には神さまが宿ると信じられ、神さまの宿る木々をきることは固く戒められていました。そうした

祖先のところが樹木を育て守り、やがてうつそつとした森となりました。その昔、私たちの祖先は山に入つてシカやイノシシ、木の実や山菜などを取って暮らしていました。山には多くの神々が宿り、「山の幸」といわれる神々のめぐみを受けたいたのでした。

ですから山に入るときは、山の神さまにお供えをし、お許しをいただくことを忘れませんでした。



門松でお出迎え

祖先の霊は山に鎮まるといふ考えがあります。祖霊はお正月には山をおり年神さまとして、子孫を訪れます。山に生えている松や竹を里に持ち帰り、松飾りをつくり門口に飾ることで、年神さまの訪れを祈る…。私たちがお正月に門松を飾るのには、そんな大切な思いが込められています。



川

水がなければ生き物は生きてはいけません。しかも飲み水がなければ人間は生きていけません。日本はおいしい水にめぐまれてます。

山は私たちにさまざまなめぐみを与えてくれ、天から降った雨水を蓄えます。山の木々の豊かさから水を清らかにし、多くの栄養素を与えて美しい川の流れをつくります。

浄化された水は、山を出ると急な斜面を流れて流れて落ち、やがて川幅を広げゆつたりとした流れとなつて里をうるおします。

里に暮らす私たちは、川から水を引



神さまから生まれた木

樹木は神さまのからだから生まれたと伝えられています。スサノオノミコトの髭がスギに、胸の毛がヒノキに、尻の毛がマキに、眉毛がクスノキになりました。やがてスサノオノミコトの子どもたちは、木の種を日本全国にまいていき、森を育てていったのです。

樹木の神はククノチ、草の神はカヤノヒメ…。日本人は一本の木、一本の草にも神さまのめぐみを感じ、大切にしてきました。

海

日本を取り囲んでいる豊かな海はたくさんめぐみをもたらしてくれます。

海の彼方には神々の住む美しい国があり、そこから寄せる波が豊かな「海の幸」を運んでくれると信じられてきました。

海の幸をいただく一方で、航海や漁業の安全を守る神さまとして信仰さ

れているのがワタツミ神やツツノオ神です。人々が海の神さまとして崇めるワタツミ神は山にも祀られています。それは、古来海に生きる人々が、海の豊かながめぐみと、山のめぐみとのつながりを感じていたからでしょう。船を操るには絶えず方角を確認する必要があり、目印となる山々は彼らにとつても大切な存在だったのでした。

蛇口って？

川の流れば、神さまの力によるものと考えられていました。山から勢いよく流れ出る水を神さまのめぐみとして受け取り、その水を引いて田畑をうるおし、豊かな実りを祈ったのです。

水の神さまはミツハノメ。オカミ…。川の流れを、蛇の行くさまに見立て龍や蛇の姿で表現されます。

水道の口を「蛇口」というのは、水の神が蛇の姿をしていたことによります。



ウミガメの卵

静岡や和歌山、そして徳島の一部の浜では、アカウミガメが夏前に卵を産みにやってきます。浜の奥に産むか、海に近い所に産むかによって、台風が来るのか来ないのかわかる、といういい伝えがあるそうです。アカウミガメは自然との何らかの感性の交流があるのでしょう。

そうしたアカウミガメの持つ力を漁師の人々が大切にし、その環境を守ってきたことが、ウミガメを助けた道島太郎の話の物語になったのかも知れません。

神話

天地の初めるとき、高天原に天の神さまが現れました。この神さまは生命を生み育てて行く力を持っていました。続いて多くの神さまが現れ、男女の神・イザナギノミコトとイザナミノミコトが現れました。

天の神さまは二神に向かい、国土を作り固めるように命じます。イザナギノミコトとイザナミノミコトは結婚し、本州をはじめとする八つの島々を生みました。

やがて二神は海、川、山や木の神、野の神たちを生んでいきます。

こうして誕生した日本の国土は、男女の神さまの結婚により生まれた神聖な国土です。

日本神話は、国土も自然も神々も、そして神々の子孫として語られる人間も、すべて「神が生んだ子どもたち」であると伝えており、このことから日本人が国土だけでなく、あらゆる自然も「神から生まれた「同胞」はらから」とみなしてきたことがわかります。

はじめに

日本は四方を海に囲まれ、国土の約7割を山地が占める島国です。

天から降った雨水は山に蓄えられ、やがて川となってさまざまな地形を形成し、大地を潤しながら海に注いでいきます。そして豊饒な大地は私たちに大いなる実りを与えてくれます。

そうして、私たち日本人は四季折々の豊かな自然から何かを感じ、恵みに感謝し、あらゆるものに神さまが宿るとして敬い、尊んできたのです。

自然を感じるところ

さまざまの虫のこゑにもしられけり
生きとしいけるもののおもひは
(明治天皇御製)

日本人の感性は日本語によっても育まれてきました。日本人にとって、自然界の物音はすべて言葉として聞かせるのだそうです。例えば虫の音は「虫の音」であって、情緒的に美しく聴こえ、季節感ややすらぎを感じ取る

ことができますが、西洋人には雑音にしか聴こえないといわれます。風の音や小川のせせらぎも言葉として受け止めてきました。金言というハンディキャップをもつあるアーティストは、川沿いを散歩した折に聞かされたせせらぎの「虫の音のせせらぎ」

に聞こえ、その「ささやき」を曲に表したといえます。

秋きぬと目にはさやかに
見えねども風のおとにぞ
驚かれぬる

『古今和歌集』

平安時代の歌人は、秋の訪れを風の音によって気付けられたと詠みました。「訪れ」とは「音連れ」であり、目には見えない神霊の動きを、言にたづねて感じてきた古代人の感性から生まれた言葉といわれています。

古歌からも、神々の来訪を風の音など、自然のかすかな変化から感じ取ってきた日本人の豊かな感性が読み取れます。

人間も自然の一部であり、ありとあらゆる自然に神さまを感じているからこそ、日本人は鳥や動物、虫の音などを、自然や神々からのメッセージとして、五感を通して感じてきたのです。

むすびに

古来、日本人は自然の中に神々の力を感じ、懐みと感謝の意を抱いて、自然と共に豊かなところを育み生きてきました。しかし現在、近代的な生活様式や考えの中で、その生き方が失われています。本当の豊かさとは、物質的な価値を求めただけで得られるものではありません。地球規模の環境破壊が危惧される今こそ、日本人が伝えてきた精神的な価値を、そしてこのころの豊かさについて考えなければなりません。

日本には至るところに「鎮守の杜」といわれる神社の森があります。何世代にもわたって私たちを見守り続けた神の森です。日々の喧騒を離れ鎮守の杜に佇むと、その静寂さに心が洗われ、清らかな気持ちになることでしょう。

神さまの鎮まる森の中で、自然との関わりを見直し、自然と共生してきた日本人の感性を取り戻したいものです。

目には見えないけれど、大切なものを感じるころ……。

